

情報文化学会 第5回全国大会 プログラム

テーマ：

情報文化への期待

主催 情報文化学会
協賛 NTTデータ通信
テレビ朝日

期日 1997年11月8日(土)

会場 東京工業大学

大学への経路

東急東横線渋谷駅より自由が丘駅で乗り換え、東急大井町線大岡山駅下車すぐ。

JR渋谷駅より目黒駅乗り換え、東急目蒲線大岡山駅下車すぐ。

<大会プログラム>

期日 1997年11月8日(土)

◆ 情報文化研究発表・作品発表 ◆

会場 東京工業大学 百年記念館

9:30～ 受付

総司会 正木 鞆彦 (情報文化学会常任理事)

10:00～10:05 開会挨拶 片方善治 (情報文化学会会長)

大会委員長挨拶 村井隆文 (東京工業大学教授)

10:05～12:00 情報文化研究発表・作品発表 (午前の部)

●統一テーマ 百年記念館フェライト記念会議室 司会 正木 鞆彦

1. 三重野 徹 (日本アイ・ビー・エム)

三重野博司 (東日本国際大学)

「情報文化と超情報化社会 (複雑系の視座から)」

2. 赤司 秀明 (日本学際会議主任研究員)

「情報文化と介護福祉 —— 学際比較考察 ——」

3. 村上 幸雄 (栄養化学研究所)

「予測される“第4の波”と情報文化 第2報」 自己実現・創造的生産性・分子矯正精神医学

4. 石黒 邦宏 (デジタルマジックラボ)

「分散型経路制御ソフトウェアの開発 —— Zebra の設計と実装 ——」

5. 小野 知洋 (金城学院大学)

「金城学院大学における情報文化学科の設置にいたる経過」

●一般 百年記念館第1会議室 司会 増田 隆昭(淑徳大学)

1. 三石 博行(金蘭短期大学)

「阪神大震災以後の生活情報発生の調査と生活情報構造分析」

2. 森田富士男(つくば国際短期大学)

「『連想』のデータベース化のモデル研究(発想支援システム・ツールの一試案の提言)」

3. 平澤 洋一(城西大学短期大学部)

「言語文化の体系化と問題点」

4. 阪井 和男(明治大学)

「情報文化におけるインターネットの意味と方向」

5. 三好 賢周(明治大学)

「情報文化と伝統文化について——京都祇園祭を中心とした考察 (1)」

6. 伊津信之介(東海大学福岡短期大学)

「情報文化を育む広域ネットワーク」

12:00～13:00 役員会(理事・評議員合同会議) 第2会議室

13:00～14:50 マルチメディア分科会セッション(第10回MM分科会研究会)

「マルチメディアと地域文化」

百年記念館フェライト記念会議室

1. 島村 和典(NTT株, 法人営業本部マレーシアプロジェクト統括部長)

「イスラム社会とMultimedia Super Corridor計画」

2. 石川 徹也(図書館情報大学)

「4.5 言語EUの情報流通」

15:00～16:30 公開講演会

「メディアと文学」

講師 吉本 隆明

会場 東京工業大学講堂

16:40～17:40 第5回情報文化学会賞 受賞式典

17:40～18:00 情報文化学会総会

懇親会(会場 百年記念館フェライト記念会議室)

阪神大震災以後の生活情報発生の調査と生活情報構造分析

金蘭短期大学 三石博行

E-mail h-mitsuishi@kinran.ac.jp

キーワード 阪神大震災、生活情報、生活情報構造モデル

1. はじめに

昨年の研究発表で、生活情報の発生モデルとして生活情報史観とその三つの異なる質の生活情報の構造について説明した¹。今回は、そのモデルを実証するために、阪神大震災直後から一年間にわたって朝日新聞社の阪神大震災関連の記事を基に統計的な分析を行った²。995年1月17日から1995年12月31日までの期間での、ライフライン、ガス、電気、水、食料、交通、仮設住宅、危機管理、復興計画、経済、防災、死者、病院、学校、ボランティア、娯楽に関する10189件の情報を二週間づつ23期間に分けて取りだしてみた。

その情報は、第一期の1月17日から1月31日で1893件、第二期の2月1日から2月15日で1481件、第三期の2月16日から2月28日で965件と、最初の三期間で全体の43%を占めているように、震災後に非常に多く発生した。(グラフ1)

2. 分析モデル・情報発生確率変化関数と情報発生率変化関数

ここで、これらの情報の発生状況を理解するために二つの分析を試みた。

第一点は、期間ごとに情報の割合を求

め情報の期間別情報発生比率をだす。(表2-1)

期間別情報発生比率の変化を示すグラフ、つまり情報発生確率変化関数を仮定して、震災発生からそれぞれの情報に関する社会的関心の相対的な度合いの変化を調べる。(表3)(グラフ3-1から16)

第二点は、それぞれの期間の情報量がその総情報量に占める割合、期間ごとの情報発生率、話題になった度合いを求め、その情報発生率変化を傾向をグラフ、情報発生率変化関数、に示し、情報が話題になった度合いの変化を時間的に比較し、情報の重要性の期間ごとに変化状況を分析する。(表4)(グラフ4-1から16)

3. 情報発生率変化グラフの示すパターンの分析

主な三つのパターン

情報発生率変化グラフは5つのパターンに分類されたが、代表的な3つのパターンについて述べ、そのパターンの発生の原因について分析し、そのパターンの示す生活情報の特徴を考察してみる。

第一のパターンに分類された、直接個人の生命の維持に必要な生活情報である電気、ガス、水や食料の情報は、震災直

後に非常に高い発生率を示し、その後短期間で急激に減少している。それは復旧活動で緊急に問題が解決されたためであると考えられる。(グラフ 4-1 から 5)

第二のパターンの復興計画、学校、病院、危機管理、交通、ボランティア、仮設住宅、防災、経済や危機管理の情報は社会システムの維持の為に必要な生活情報であり、震災直後に非常に高い発生率を示し、その後短期間で緩やかに減少している。それは復旧活動で問題が、完全ではないが少しずつ解決されていったためであると推測できる。(グラフ 4-1 から 15)

第三のパターンの娯楽の情報は余暇活用の生活情報である。発生率変化は傾向を持たず、全区間に激しく増減するパターンを示している。(グラフ 4-16)

生活情報発生率変化グラフ分析の限界

情報の発生率は全体量としても相対的に震災直後から時間が経つにつれて減少するので、その減少の度合いをだけを見てデータを明確に分析することは出来ない。そのため生活情報発生率変化グラフのパターンから生活情報の構造を的確に分析し、その特徴を明瞭に見つけ出すことはできない。事実、「個人の生命を維持するための生活情報」に発生率変化グラフのパターンと「社会システムを維持するための生活情報」の発生率変化グラフのパターンとが類似している。また、明らかに異なるパターンを示した娯楽の生活情報の場合でも、特徴的なパターンを示さなかった。

4. 情報発生確率変化グラフの示すパターンの分析

分類から7つの異なる生活情報発生確率変化のパターンが確認されたが、その中から主な5つのパターンについて分析し、その生活情報の特徴について解釈を試みる。

第一のパターンは、食料、ガスの示すもので、震災直後から短期間で急激に減少し、その後は一定した低い確率を示す。この情報は典型的な「直接個人的な生命維持に必要な生活情報」の発生パターンで、震災直後に最も重要な情報として発生し、その後は対策が取られるにつれて、その重要性が減少したと考えられる。(グラフ 3-1 から 2)

第二のパターンは、電気や水の情報発生確率変化グラフの示すもので、震災直後から次第減少し、その後に再び上昇してまた年末には再び減少する。それは第一の例と同様に「直接個人的な生命維持に必要な生活情報」であるが、復興都市計画などの理由によって、時間が経過するにしたがって話題に上がった可能性が強い。そのため、再びそれらの発生確率が増加する時期では「社会システムの構築に関する情報」の情報発生確率変化の傾向を持ち込んだ可能性がある。(グラフ 3-3 から 4)

第三の経済、病院、防災、学校、復興計画の示すパターンや危機管理や交通の示すパターンは、その発生確率は災害直後から12月31日まで、値は上下しながらも平均値は変化しないが、震災発生直後から年末にかけて発生確率は緩やかな減少を示す。それらは震災後から長時間か

けて問題になる「社会システムの構築に関する情報」の発生確率変化を示すものであると考えられる。(グラフ 3-5 から 9)

第四のボランティアや仮設住宅の示すパターンは、震災直後からその確率は高く、しかも次第に情報発生確率は時期を経るごとに緩やかに増加して行く。それらは「直接個人的な生命維持に必要な生活情報」と「社会システムの構築に関する情報」の二つの要素を持つ情報の発生確率を示すものであると考えられ、第一のパターンと第二のパターンが重なり合ったと考えられる。(グラフ 3-10 から 11)

第五の娯楽の示すパターンは、震災直後にはその確率はほとんど無いが、時間とともに次第に高い確率で発生し続ける。それは典型的な「余暇に関する情報」の特徴を示すもので、震災から復旧してゆく時期に、被災者を励ますイベントが次第に取り上げられたと考えられる。(グラフ 3-12)

この生活情報発生確率変化のグラフのパターン分析は、生活情報発生率変化のパターン分析よりも、生活情報の質的違いをグラフ変化で特徴を示すことができた。

5. 生活情報構造モデルからの解釈

すでに、一次的生活情報と呼ぶ「個体保存と種族保存の生活情報」、二次的生活情報と呼ぶ「文化や社会システムの機能維持や再生するための生活情報」、そして三次的生活情報と呼ぶ「余暇、レジャー、文化活動、遊び等々に関する生活情報」の三つの生活情報のモデルを提起した³。この三つのモデルに即して阪神大

震災直後から生活情報を分析してみる。

一次的生活情報の発生モデル

一次的生活情報は、人間生命の個体保存のための衣食住に関する生活情報と家族、共同体、社会集団の機能を維持するための生活情報である。これらの生活情報は最も基本的な生活構造に関するものである。したがって、阪神大震災のように、生活構造が全面的に破壊されるなら社会はそれらの生活構造を復旧しようとする。そのため、それらについての情報、一次的生活情報が発生する。

その発生は震災直後に最も優先して登場するので、情報発生率の変化グラフは電気、ガス、死者、水、食料、の示すグラフのように震災直後、非常に高い発生率を示すが、その直後急激に減少し、一定の発生率に達しその後は低い比率で発生が続く。

その発生確率も震災直後に非常に高く、その後は急激に減少すると想像できるので、情報発生確率変化グラフは、食料やガスの示すパターンのように震災直後から急激に減少し、その後は一定した低い確率を示す。

以上のことから、この情報の特色は情報発生変化グラフと情報発生確率変化グラフが共に逆比例関数のようになっていることである。

二次的生活情報の発生モデル

二次的生活情報とは伝統、文化の機能から生じている生活情報で、社会システムを機能、維持、再生するための情報である。したがって、阪神大震災のように、生活構造が全面的に破壊された場合、社

会はそれらの社会機能を復旧しなければならぬ。それと同時に都市計画や将来構想の課題が持ち上がるため二次的生活情報としても発生することになる。したがってその情報は、短期間のうちに急激に発生すると言うよりも、長い時間をかけて発生し続ける可能性が高くなる。

情報発生変化グラフは、復興計画、学校、病院、危機管理、ライフラインのグラフのパターンで示されたが、情報発生率は震災直後非常に高い、しかしそれは、一次的生活情報のパターンに比べると、緩やかに減少して、その後は低い情報発生率を示すものと、交通、仮設住宅、防災、経済等のように、その後もある程度の比率で情報が発生し続けるものがある。その原因は、課題が早期に解決のつく状況である場合か、長い時間が必要な状況である場合かによる違いではないかと思われる。

情報発生確率変化のグラフは経済、病院、防災、学校、復興計画の示すパターンで、その平均的な発生確率は災害直後から、一定期間その発生確率に多少の上下はあるものの、ほとんど変化していないものと、危機管理や交通の示すパターンのように、震災発生直後から年末にかけて発生確率は減少を示すものと、仮設住宅やボランティアの示すパターンのよ

うに震災直後から情報発生確率は時を経る毎に、緩やかに増加して行くものが考えられる。

以上のことから、この情報の特色は情報発生率変化は一次的生活情報と同じように逆比例関数になるが、情報発生確率変化は一次方程式のような比例関数に近い形で現れる

三次的生活情報の発生モデル

三次的生活情報は余暇、レジャー、文化活動、遊び等の「過剰な生活時間の生活情報」である。

この情報の発生率変化グラフの特徴は、娯楽のパターンが典型的に示すように、情報発生率変化が、震災直後から最後まで、ある期間は増えたり減ったりしながらも、結局ほとんど変化を見せないことである。

この情報の発生確率変化グラフは、娯楽のパターンに見られるように、震災直後にはその確率はほとんど無いが、時間とともに次第に高い確率として発生し続ける。

つまり、三次的生活情報の特色は情報発生率変化は定数であるが、情報発生確率変化は一次方程式のような比例関数に近い形で現れる。

註

¹ 三石博行 「生活重視の思想と生活情報」第四回情報文化学会講演予稿集 1996.11 5-12p

² 朝日新聞社 「1995年版CD-ROM」

³ 三石博行 「生活情報構造の発生学・生活情報史観 -阪神大震災の生活情報発生とその構造分析のためのモデル-」1997年度社会経済システム学会研究発表、1997.11